

大倉喜七郎と北海道神宮 —大倉シャンツェと比田井天来《蔵春閣扁額》について— 四宮 美帆子

このたび、北海道札幌市にある北海道神宮(旧：札幌神社)より大倉喜七郎が主に関わった大倉財閥に関係する資料を頂戴した。本稿では、いただいた資料の紹介を行うとともに、そこから導きだされる問題点について若干の考察を行う。資料の具体的な内容は、大倉喜七郎が建設にかかわった大倉シャンツェ(現：大倉山ジャンプ競技場)と、比田井天来筆《蔵春閣扁額》に関するものである。

1. 大倉シャンツェ(現：大倉山ジャンプ競技場)

『大倉集古館 年報・紀要』2号では、「神戸大倉山公園誕生の軌跡―大倉家神戸別荘旧蔵品調査報告を兼ねて―」と題して兵庫県神戸市中央区楠町 7 丁目にある、大倉喜八郎の別荘があった大倉山（旧安養寺山）について紹介を行った。本稿では、北海道札幌市中央区に、喜八郎の嫡子喜七郎によって建設が進められた「大倉シャンツェ(現:大倉山ジャンプ競技場)」と名付けられた、標高 307m のもう一つの「大倉山」についての資料を紹介する〔注 1〕。

大倉シャンツェ（シャンツェとはドイツ語でスキージャンプ台のこと）の「大倉」とは、ジャンプ台建設に協力した大倉喜七郎の名前からとられたものである。現在「大倉山」と呼ばれるこの地は、当時は北海道神宮（旧：札幌神社）の所有地（飛地境内）であり、山の名前がついていたわけではなかった。しかし、「大倉シャンツェ」の名前から「大倉山」と呼ばれるようになり今に至っている。このような経緯により、北海道神宮には、建設に関わる図面が所蔵されるとともに、『社務日誌』にはシャンツェ建設の状況を示す記録が残されている。

シャンツェ建設は、昭和 3（1928）年 2 月に北海道を訪れた秩父宮雍仁親王（1902～1953）の考えによるところが大きい。「スポーツの宮様」と呼ばれた雍仁親王は、札幌でスキーを楽しんだ際、北海道大学（旧：東北帝国大学農科大学）でスキー部（以下北大スキー部と略す）部長であった大野精七に対して、「冬季オリンピックは札幌で開くべきで、それには大型ジャンプ台が必要」と話し、建設の力添えを約束したという。

大野精七は、日本の産婦人科学の発展に貢献した医学部教授の身であるとともに、「(北海道の) 冬の生活には、寒さと雪を克服する体力が必要なので、雪に親しもう」と考えてスキーを始め、北大スキー部第 5 代部長に就任している。大野は一般に普及していなかったスキーを広めるために、札幌市西部の手稲山に日本最初のスキー小屋「パラダイス・ヒュッテ」を建設している。北大スキー部は、昭和 2（1927）年の第 1 回全日本学生スキー競技会では総合優勝を果たし、昭和 3 年に開催され、日本初参加となった第 2 回冬季オリンピックスويس大会へ選手を派遣するなど、日本におけるスキー強豪校であった。このような縁から大野は雍仁親王がスキーを楽しんだ際の警護と案内を任されていた。

雍仁親王からの申し出を受けて大野は、全日本スキー連盟常務委員の廣田戸七郎や、ジャンプ選手の伴素彦らと相談し、日本におけるジャンプ競技場の建設についての構想を、昭和 3 年 11 月 10 日の昭和天皇即位大礼の日に雍仁親王に啓上することとした。この日は、雍仁親王をはじめ、細川護立、全日本スキー連盟会長稲田昌植、国際スキー連盟加盟の労をとった京都大学教授木原均、そして大倉喜七郎が集まったという。大野は、シャンツェ建造の専門家が日本にいない事実や、競技向上のために指導者や選手を海外から呼びたいという希望を伝えた。その際、大倉喜七郎の発意により、競技場設計技師 1 名、ジャンプ選手 1 名、複合選手 1 名をスキー先進国のノルウェーから招聘し、実地調査の上建設を行うことを決定し、直ちにノルウェー公使を通じて招聘を依頼したという。

ノルウェー外務省は、この招聘依頼を王位継承者と日本スキー界のトップからの要請と受け止め、当時ノルウェースキー界の最高指導者とされたオラウフ・ヘルセツト中将と、オウレ・コルテルードとヨオン・スネルスルードの 2 選手を日本へ送ることを決定した。彼ら 3 人は、昭和 3 年 12 月 31 日に下関に到着。大晦日から翌年正月 4 日まで東京で歓迎を受け、1 月 4 日午後に札幌へと到着する。以後 3 月まで、シャンツェ建造の候補地探しと、スキー技術を日本に紹介する講演や指導などを行う旅に出ることとなる。

シャンツェ候補地については、1 月 8 日には、1 回目のシャンツェ候補地探しを行い、札幌市中央区の三角山南方に目星をつけ、ヘルセツトらは自らがスコップを握り十数人の作業員と建造に奮闘したという。北海道神宮の『社務日誌』には、1 月 10 日に「スキー場として飛地境内一時使用願の件に付大倉鉱業組廣瀬省三郎午後二時来社。」とあり、翌日には宮司が実地調査のために現場を訪れていることから、1 回目の候補地探しに関連するものであったと思われる。

さて、シャンツェ候補地については、2 月 20 日に函館で 2 回目の候補地探しを行うが期待に沿う場所は見つからず、2 月 22 日に 3 回目のシャンツェ候補地探しを札幌で行っている。その際、三角山の東側に 60m 以上飛べそうな候補地を見つけ、さっそく建造を始めている。2 月 24 日までヘルセツトらはこの候補地で作業をつづけたが、次の予定のため作業を廣田戸七郎らにゆだねて移動している。『社務日誌』をみると、2 月 25 日に大倉鉱業小樽出張所員・織原三郎が社務所を訪れていることが分かり、この 3 回目のシャンツェ候補地に関する行動であることが分かる。この地がのちに「大倉シャンツェ」と名付けられることとなる。

この場所は、もともと国幣大社であった北海道神宮の所有地であったが、雍仁親王の尽力により使用を許されたといわれ、大倉鉱業や

大倉組(現:大成建設)が建設にかかわり、総工事費 5 万円(現在の 14 億円程度か)を投じて、昭和 6(1931)年 10 月に完成、大倉喜七郎によって札幌市に寄贈されたという。翌 7（1932）年 1 月 16 日に竣工し、開会式の際に札幌市長で札幌スキー連盟会長・橋本正治によって「大倉シャンツェ」と命名された。『社務日誌』の同日の記録には「大倉山（秩父宮）シャンツェ竣工修葺」とあり宮司によって竣工修葺が行われたことが分かる。

大倉シャンツェは、昭和 45（1970）年に冬季オリンピック札幌大会に向けて大改修を行い、「大倉山ジャンプ競技場」と名称を改め、現在に至っている。

以下、今回情報を頂戴した北海道神宮『社務日誌』の中の大倉シャンツェ関連の記事である。

■**昭和 4 年 1 月 10 日（社務日誌）**

スキー場として飛地境内一時使用願の件に付大倉鉱業組廣瀬省三郎午後二時来社。北門日報社支局土田河川外一名来訪

■**昭和 4 年 1 月 11 日（社務日誌）**

午前十一時宮司飛地境内地スキー場実地調査のため出張せらる

■**昭和 4 年 1 月 12 日（社務日誌）**

午後一時飛地境内地スキー場実地視察のため小野雇を遣わす

■**昭和 4 年 1 月 19 日（社務日誌）**

午後零時半高松宮殿下三角山スキー場に御成

■**昭和 4 年 4 月 25 日（社務日誌）**

大倉鉱業社小樽出張所員織原三郎ジャンプ台建設問題に付来社

■**昭和 4 年 6 月 25 日（社務日誌）**

午前八時飛地境内十二軒坂に大倉組ジャンプ台建設に付測量致したき旨申出たるにつき清水出仕後藤庸人を随へ監督のため出張せり

■**昭和 4 年 6 月 26 日（社務日誌）**

小野雇飛地境内出張大倉組測量監督のため

■**昭和 4 年 6 月 27 日（社務日誌）**

飛地境内大倉組測量監督として後藤庸人を派遣す

■**昭和 4 年 6 月 29 日（社務日誌）**

午前四時主典清水出仕を随行飛地境内に大倉組工事監督のため出張

■**昭和 4 年 7 月 6 日（社務日誌）**

飛地境内スキーシャンツェ建設問題談合会を道庁学務部長室に於いて開催につき宮司午前十時出席せらる

■**昭和 4 年 7 月 9 日（社務日誌）**

午前十時半宮司には禰宜随行本郷氏案内飛地境内就中大倉組工事にかかるスキーシャンツェ建設地並其付近一帯に出張

■**昭和 4 年 8 月 1 日（社務日誌）**

午後二時道庁に於いて飛地境内スキー場飛躍台問題に付疑義のため稲垣学務部長大野北大教授等と会議のため宮司登壇せらる

■**昭和 4 年 8 月 2 日（社務日誌）**

午後一時宮司飛地境内シャンツェ建設の件につき上廳

午後四時稲垣学務部長来社せらる（スキー場の件に付）

■**昭和 4 年 11 月 8 日（社務日誌）**

北海道庁地方林課長林常夫技師ジャンプ台問題の件に付来社宮司面談せらる

■**昭和 4 年 12 月 6 日（社務日誌）**

宮司午前中飛地境内スキー場視察のため十二軒澤へ行かる

■**昭和 5 年 1 月 12 日（社務日誌）**

午前八時札幌スキー連盟主催高松宮記念シャンツェ竣工修葺式を執行 村井禰宜 小野雇 柏見習出張す

■**昭和 5 年 1 月 18 日（社務日誌）**

午前八時札幌スキー連盟大野博士外三名参拝

■**昭和 5 年 2 月 11 日（社務日誌）**

札幌神社外苑記念シャンツェ付近に於いて午後一時より行はるる札幌市小学校並に附近郡部小学校スキー大会出場選手約百余名市教育課長引率の下に参拝す

■昭和5年2月15日（社務日誌）

午後より飛地境内記念ジャンプ台を中心にスキー競技会開催せらる

■昭和6年5月12日（社務日誌）

午前九時半北大野博士飛地境内地秩父宮記念シャンツェ建設の件につき来社。宮司応接せらる。同上の件につき宮司には上庁せられ午後二時半学務部長中村社寺主任来社。宮司案内にて飛地境内地記念シャンツェ候補地を檢視せらる

■昭和6年6月18日（社務日誌）

午前十一時秩父宮記念シャンツェ敷地地鎮祭石井主典小野出仕柏見習奉仕す

■昭和6年8月6日（社務日誌）

午後二時宮司には道庁学務部長同行にて飛地境内シャンツェ工事現場視察のため現場に出張せらる。帰途学務部長には中村社寺主任同行にて貴賓館参集所建築物を檢視せり

■昭和7年1月16日（社務日誌）

大倉山（秩父宮）シャンツェ竣工修祓

2. 比田井天来筆《蔵春閣扁額》



図1 比田井天来筆《蔵春閣扁額》北海道神宮所蔵

現在、北海道神宮内に、書家の比田井天来筆《蔵春閣扁額》が掲げられているとの情報もいただいた（図1）。比田井天来（1872～1939）は、明治書道界の第一人者である日下部鳴鶴（1838～1922）に学び、古碑法帖を多角的に研究、古典臨書の新分野を開拓し、その独創性により「現代書道の父」と呼ばれた書家である〔注2〕。本作は天来の傑作の一つに数えられる篆書体の書額である。

この額字にある「蔵春閣」とは、大倉喜八郎が東京向島に造った別邸迎賓館の名称と同じものである。明治45（1912）年4月に竣工、喜八郎の死後は嫡子の喜七郎が管理したが、第二次世界大戦中に海軍の管理となり、戦後は占領軍のために設けられた国策会社 RAA 協会に買い取られ、高級将校向けの接待施設に使用された。解除時期は不明だが、昭和26（1951）年までに民間の手に渡り料亭となっている。更にこの建物は、紆余曲折を経て、平成24（2012）年12月に大倉文化財団のもとへと寄贈され、喜八郎の出身地である新潟県新発田市に移築、令和5（2023）年3月に新発田市に寄贈されて4月より一般公開されている〔注3〕（図2）。

ここで疑問に思うのが、天来が生きていた時代に東京にあった蔵春閣の扁額が、なぜ北海道神宮に存在しているのであろうか、ということである。現時点では明確な答えを出すことが難しいが、本稿ではいただいた情報をもとに、簡単な推論を記しておきたい。

まず、制作年について考えていく。本作は一般的に年号を記さない室号（書斎などに付けた雅号のこと）を書いたものであるため、具体的な制作年が不明であり、制作経緯を知る基本的な手掛かりがない。そのため、書風や状況証拠から制作時期や経緯を推測することとなる。



図2 蔵春閣

天来と北海道神宮との関係のみていくと、天来は、大正8（1919）年、東京高等師範学校講師を辞し、大規模な遊歴を始める。その間、5月から11月まで北海道全道をまわっており、一般にこの扁額は大正8年の北海道遊歴中に揮毫したものと考えられている。

天来の書風の変遷は、若い頃は師の日下部鳴鶴が使用した羊毛筆での廻腕法を用いており、師の影響が色濃くという。それが、大正3（1914）年頃に剛毛筆を用いた俯仰法を発見し、北海道遊歴の大正8年が画業における一つのピークとされる。その後の昭和9（1934）年以降は、また羊毛筆を多く使い新たな味わいの書を手掛けるようになるとされる。

本作は、大正8年の北海道遊歴の際に制作した他の作品と近似し、書風からも大正8年の作として大過ないとのことである〔注4〕。また、本作には遊歴時に使用した篆刻家・河井荃廬（1871～1945）作の印章

を捺している。河井荃廬の印の使用は大正期以降と考えられ〔注5〕、印章の面からいうと明治期の制作の可能性がなくなる。

そして本作が、北海道神宮に施入された時期を推察することができる資料としては、北海道神宮『宝物貴重品台帳』昭和15（1940）年星野主典殿調〔03-01-0129〕懸額之部に「〔蔵春閣〕一尺五寸天来書」とあるとのことである。大正8年の北海道遊歴の際に揮毫し、北海道神宮に収められ、昭和15年時点で所蔵されているという流れで齟齬はない。

ただし、この蔵春閣が、大倉家の迎賓館のことを指す場合は、話が一筋縄ではいかなくなる。今回情報をよせてくださった北海道神宮の後藤氏の話では、『社務日誌』の記録から、大倉家（喜七郎）と北海道神宮の縁は、大倉山ジャンプ競技場の建設以前や以後には考えられないとのことである。そうすると、昭和4年から7年（1929～32）頃の間ということとなり、大倉家の迎賓館である蔵春閣のために揮毫したのであれば、この時期以前の制作となる。大正8年頃に大倉家のためにこの扁額を制作し、後の昭和4年から7年の間に北海道神宮へ施入されたと考えることも可能ではあるが、制作においても、施入においてもその契機が見えてこない。

念のため、先に書風の上で否定した時期も含め、蔵春閣のために制作された場合について考えておく。まずは、竣工時に収められた可能性を探っておく。蔵春閣の竣工当時の写真は、写真集のような形では残っていないが、各種雑誌に掲載されており、『蔵春閣移築工事報告書』にまとめられている〔注6〕。それを見ると、玄関に扁額を掲げていた形跡はないが、明治45（1912）年の『建築工藝叢誌』第1期第6冊には、「含雪」の署名のある蔵春閣の書額が2階に掲げられている（図3）。含雪は山縣有朋の雅号であり、『建築工藝叢誌』の掲載時期を考えると、竣工の祝いで贈られたものであると考えられる。そして、天来の書が竣工時に掲げられていた形跡はなかった。ただし、蔵春閣の内部装飾の一部は状況に応じて変更していることが知られている。例えば、2階上段の襖絵は、明治45（1912）年発行の『建築工藝叢誌』に載る「鳳凰図襖」（現在所在不明）と、大正7（1918）年発行の『住宅建築寫真集成第参輯』に載る「檜楨秋草図襖」（現：三井記念美術館蔵）で異なっている。季節や会合の内容によって取り替えたと考えられる。そのため、天来の書額が竣工時になかったと断定することはできないが、少なくとも、記録の上では、

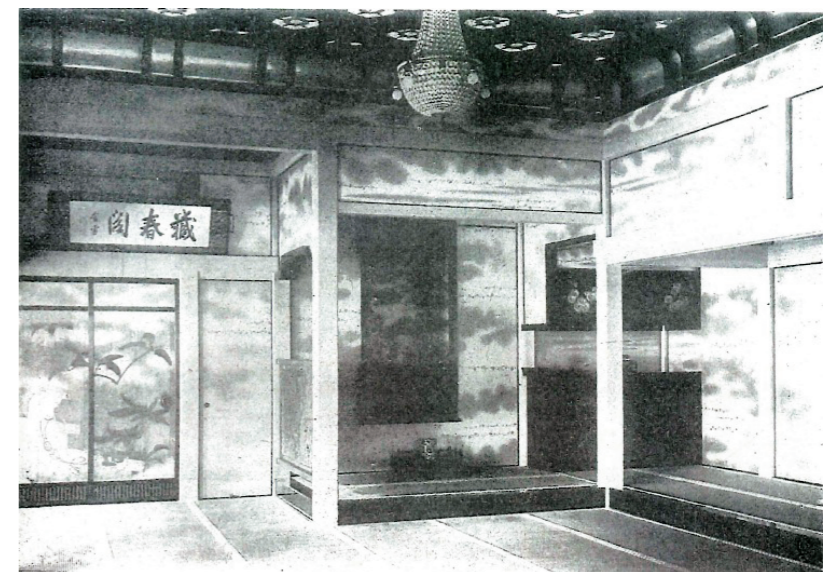


図3 向島大倉氏別邸蔵春閣階上大廣間（其二 左側）『建築工藝叢誌』第1期第6冊、1912年



掲げられていた形跡はみられなかった。また先に述べた書風や印章の問題から考えても竣工時に収められた作ではないと考えられる。そして、それ以外の時期に納められた契機をみつけることはできなかった。

また、仮に蔵春閣にあったとして、北海道神宮に移った時期についても考える必要がある。大倉喜七郎と北海道神宮のかかわりがあった昭和 4 年～ 7 年との可能性もあるが、現時点で建物に付随する室号を施入する理由が見えてこない。次に考えられる可能性としては、蔵春閣が大倉家の手を離れた時期、つまり海軍の管理に移った時期と考えられる。ただし、昭和 15 年には北海道神宮に所蔵されており、不明な点が多い。この仮説もはるばる北海道まで移す積極的な理由がみあたらない。

以上のように、蔵春閣に天来の書額があったかどうかは不明な状態となる。

さらに考えるべきは、大倉家と天来との繋がりについてである。喜八郎は自ら光悦流と称した書をものし、書家とのつながりを多く持っていた。ただし、具体的に作品を依頼したり、何らかの関係が見えるのは、天来の師にあたる日下部鳴鶴や、巖谷一六（1834～1905）などの天来より一つ前の世代の書家が多く、天来との直接の関係は管見の限りみられなかった。

また、喜七郎と天来のかかわりはどうだろうか。喜七郎は書道を愛し、書家の松本芳翠（1893～1971）に師事して楷書を学んでいる〔注 7〕。芳翠は天来と面識があり、昭和 3 年の戊辰書道会設立の際に三者はかかわりを持っている。北海道神宮と喜七郎の縁が生まれる頃には喜七郎と天来は面識があったことが分かり、それに続く泰東書道院設立にも関係している。ただし天来は、泰東書道院を脱会し、昭和 12（1937）年に大日本書道院を作っている。もし喜七郎と天来の縁が生まれたとすれば昭和 3 年頃からであろう。喜七郎の依頼で揮毫したが何らかの契機に北海道神宮に収められたのであろうか。しかし、あえて別邸の貴賓室の室号を書いた作品を北海道神宮に施入する契機が見えてこない。また、喜七郎と天来は面識はあったと思われるが、天来との直接的な関りを示す資料を見つけることはできなかった。

長々と推論を重ねたが、大倉家や蔵春閣と天来のつながりを考えると、この作品がどこで制作されたのか、いつ制作されたのか、どのような経緯で制作されたのかなど、具体的な資料が見つからないのが現状である。

最後に考えるべきは、扁額に記された「蔵春閣」という名称は、本当に大倉家別邸迎賓館の名称なのであろうかということである。管見の限りではあるが、明治の頃に建てられた「蔵春閣」の名前をもつ建物がもう 1 軒存在している。それは、明治 41（1908）年 9 月に、長野市の城山公園につくられた、一府十県連合共進会の貴賓接待館として建てられた蔵春閣である〔注 8〕。当初は、長野市公会堂の城山館（じょうざんかん）の東隣に建設されたことから、「城山館東館」と呼ばれたが、間もなく「蔵春閣」と命名されたという。

この建物は、原敬、若槻礼次郎、犬養毅といった総理大臣経験者も講演におとずれたという歴史をもつものである。彼らの中には大倉喜八郎と縁のある人物もあり、東京と長野の 2 つの蔵春閣に訪れた人物も存在したかもしれない。長野の蔵春閣は、後の昭和 42（1967）年 5 月 2 日に 2 代目の建物が建ち、その建物も老朽化のため平成 30 年（2018）3 月末をもって閉鎖されたという。

現在知る限りでは、大正から昭和にかけて存在した蔵春閣は 2 軒となるが、両者の立地は東京や長野であり、その扁額が北海道神宮に現在存在する理由が見えない。ただし、この事実は、蔵春閣という名の建物が北海道に存在したという仮説をたてることを可能とする。北海道神宮内で蔵春閣という建物を建てようという何らかの気運があったのか、または大倉家とは関係のない何らかの縁により施入されたということも考えられ、本件については後考を期すこととしたい。

以上、北海道神宮と大倉家や大倉財閥とのかかわりを示す資料を 2 件紹介した。今後の大倉財閥研究や、書道史の研究に資するものとしてここに紹介するとともに、比田井天来筆《蔵春閣扁額》の制作経緯に関する情報提供を期するため、この場を借りて紹介した次第である。

最後になりましたが、本稿で紹介した北海道神宮に関する資料は、北海道神宮総務部の後藤優美子氏よりお寄せいただいたものです。貴重な資料のご提供、情報の掲載許可をご承諾くださいました宮司様、総務部長様をはじめ北海道神宮の皆様には篤く御礼を申し上げます。
(しのみやみほこ・主任学芸員)

〔注 1〕：大倉山ジャンプ競技場の歴史については下記を参照した。

・小川勝次『日本スキー発達史』〔昭和 4 年（1929 年）〕（朋文堂、1956 年）

・「札幌の山・峠 - 中央区」（札幌市教育委員会編『札幌地名考（さっぽろ文庫；1）』、北海道新聞社、1977 年）

・小原昌巳『大倉シャンツェ』（札幌市教育委員会文化資料室編『札幌風物誌（さっぽろ文庫；3）』、北海道新聞社、1978 年）

・大野精七『札幌・スキーの歩み』（札幌市教育委員会文化資料室編『冬のスポーツ（さっぽろ文庫；16）』、北海道新聞社、1981 年）

・大倉雄二『男爵：元祖プレイボーイ 大倉喜七郎による優雅なる一生』（文藝春秋、1989 年）

・「数々の名ジャンパーを生んだ 大倉山ジャンプ競技場」（『広報さっぽろ中央区版－歴史の散歩道（7）』1994 年 1 月号）

・「スキー発展の功労者 大野精七」（『広報さっぽろ中央区版－歴史の散歩道（37）』1997 年 3 月号）

・荒井博「1929 年における最初のスキー指導者オラフ・ヘルセットのノルウェーからの招聘」（『スキー研究』16-1、2019 年）

・「大倉山の歴史」（大倉山ジャンプ競技場ウェブサイト、2025 年 10 月 1 日閲覧）

〔注 2〕：比田井天来については、比田井和子『現代書道の父：比田井天来』（天来書院、2009 年）参照。

〔注 3〕：蔵春閣については、『蔵春閣移築工事報告書』（新発田市、2024 年）参照。

〔注 4〕：天来の書風や作品についての見解は、大東文化大学・高橋利郎氏のご教示および、前掲注 2『現代書道の父：比田井天来』参照。

〔注 5〕：高橋利郎氏のご教示による。

〔注 6〕：前掲注 3『蔵春閣移築工事報告書』（新発田市、2024 年）参照。

〔注 7〕：大倉喜七郎と松本芳翠や比田井天来との関係については下記を参照。

・大倉集古館『大倉組商会 150 周年 偉人たちの邂逅－近現代の書とことば－』展図録。

・「知られざる比田井天来 第 28 回 噫・比田井天来翁 / 松本芳翠」（天来書院ウェブサイト。初出は『書海（2 月号）』1939 年。2025 年 10 月 1 日閲覧。https://www.shodo.co.jp/unknownntenrai/episode_28/）

〔注 8〕：長野市の蔵春閣については

・『長野市公文書館便り（34）』（2018 年、https://www.city.nagano.nagano.jp/documents/2003/740016.pdf）

・「Paper Garden Blog」『蔵春閣』（2025 年 5 月 4 日掲載、https://studio-sakyo.jp/wp/archives/12080）